

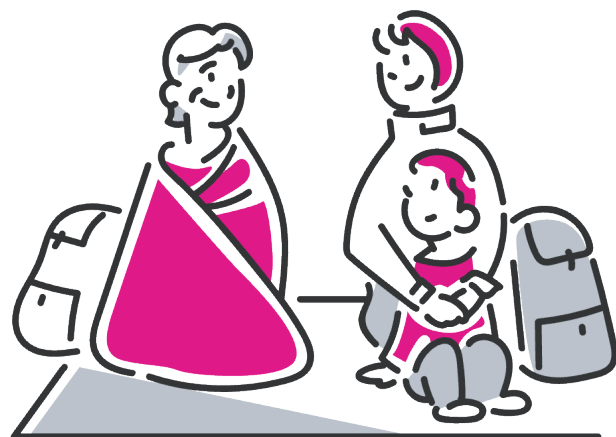
知っておこう

考えよう



医療的ケア児者の 災害時の備え

～ 体験談と情報～



はじめに

近年、全国各地で地震・大雨等の災害が数多く起こっています。
今後、確実に起こるであろう災害に備えて、いざという時に落ち着いて行動できるよう普段から準備をしておくことが非常に大切です。

とはいっても、医療的ケアのある生活は毎日が忙しく、そのような中で、災害が起こった時の状況を想像し備えることはとても難しいことと思います。

この冊子では、医療的ケアのある方のご家族や支援される方が、実際に災害を体験した時のことを振り返ってお話いただいたことを、詳しく掲載しています。

災害時の、よりリアルな状況を想像することで、今後起こるであろう災害への備えを考えるきっかけになればと願っております。

後半には、災害へ備えるためのヒントになるような情報も掲載しています。

ぜひ、ご家族や支援して下さっている方・地域の方等と一緒に災害の備えについて話してみてください。

もくじ

体験談編

ご本人・ご家族

19歳・泉区・Aさん	P 1
11歳・若林区・Bさん	P 2
14歳・太白区・Cさん	P 3
20歳・宮城野区・Dさん	P 4
9歳・青葉区・Eさん	P 5

※被災当時の年齢です

支援者

学校教員、Fさん	P 6
看護師、Gさん	P 7
相談支援専門員、Hさん	P 8
訪問入浴、Iさん	P 9

情報編

調べてみよう！ P11

- ・あなたのお家は安全？ どんな時に避難が必要？
 - ・命を守るために…（電源の確保）
- ・ネットワークの確保のために…充電できる場所は？

つながろう！ P12

- ・当事者やご家族、支援者、地域の人とつながる

備えよう！ P13

（例）災害時のバッテリー

（例）事業所の備蓄

作ってみよう！ P15

- ・私の災害時個別計画（パーソナルプラン）

災害当時の状況

災害の種類	地震（東日本大震災）
季節・天候	平成 23 年 3 月 11 日（曇り～雪）
被災した場所	通所施設
医療的ケアの内容	吸引・経管栄養（胃ろう）
家族構成	本人、両親（40代）、妹（19歳）、妹（6歳）
家庭の状況	家族は健康で本人の他に介護を要する家族はいない。父の実家は県外（東北）、母の実家は県内。母の実家からの支援は受けやすい。

要約

東日本大震災時、Aさんの家族は周囲の協力により困難を乗り越えた。発災時、Aさんは施設で預かってもらえ、家族は各々の安全を確保した。電気は翌日に復旧し、飲用水とトイレ用は確保していたが、経管栄養容器消毒用の水が不足し、アーチルから供給を受けた。家族は車のガソリンを常時半分以上保つようになり、モバイルバッテリーを複数準備するようになった。災害時の経験から、家族は人的ネットワークの重要性、情報発信の必要性、避難場所の確保、信頼できる薬局の存在、そして家族が本人に守られていることを学んだ。

発災時の被害状況

自宅の電気・水道・ガスが全て止まってしまったため、情報は車のテレビから得ていた。

発災時の状況・どのタイミングでどのように動きましたか？

発災直後～72時間（3日後）までの状況

・発災時、本人は通所施設。父は仕事。上の妹は学校。下の妹は保育園。母は本人を迎えに行く途中だった。車（2,500cc）が何度もジャンプした。施設手前の橋は30cm程度ズレて段差が生じており、車で乗り越えられる高さではなかった。橋の上には10台の車が取り残されていた。立ち往生しているときに、上の妹から母に「迎えに来て欲しい」と連絡があり、いったん上の妹をピックアップし、その後、下の妹を保育園に迎えに行き自宅に戻った。その後、再度本人を通所施設に迎えに行こうとしたが、信号が消えて大渋滞で車が動かせず、やむを得ず自宅に戻ったところ、通所施設から連絡がきて「本人は本日通所施設で預かる」と提案された。次の日、橋を通らないよう迂回して本人を迎えに行った。

・自宅に被害がなかったため避難する必要がなかった。もし、本人と避難することになった場合、吸引器、吸入器、胃ろうケアのためのグッズ、オムツなど必要な物品が多く、移動が大変だと思われる。

・当時15名のヘルパーが入っていた。8名のヘルパーからそれぞれ安否確認が入った。

・はじめは水道から薄茶色の濁った水が出たので、浴槽等にできるだけためた。

72時間（3日後）～1週間程度の状況

・電気は次の日の17時頃に回復した。
・3日目、飲み水とトイレ用は確保してあったが、経管栄養容器消毒用の水が不足した。アーチルから安否確認の連絡が来たので消毒用水の不足を伝え、水を運んでもらった。その後、すぐに断水は復旧。

・家族は、本人用のオムツに排泄し吸水シート（ペット用シート）で包むとにおいは全くしなかった。

・本人の食事は経腸栄養剤。いつもお願いして

いた調剤薬局から「経腸栄養剤は大丈夫ですか？必要なら在庫を優先してストックしておきますよ」と連絡をもらった。経腸栄養剤の工場は津波で流されていたが、代替として流動食用の他の商品も優先して確保してくれるという話があった。

事前の備え

ハザードマップ等で自宅での危険を確認していましたか？

・いいえ

自宅等で普段から準備していたもの、ことはありますか？

・医療的ケアに関すること…本人の医療的ケア用品、オムツ、経腸栄養剤、消毒液（ミルトン・アルコール）、ビニール袋、ラップ、マスク、トイレトペーパーとティッシュは大量に用意していた。

・その他…災害用保温シート、飲用水、カセットコンロ、常温で長期保存できるゼリー、お菓子、ジュース、父の会社から配給された保存食。

支援者や地域の人と準備していたことはありますか？

・普段から支援者との関係性は良好。ヘルパー、民生児童委員、近所の薬局（医療的ケア物品購入薬局）等からの声掛け（支援の申し出）はありがたかった。

・別居の祖父母も被災していたが、車でかけつけてくれて、石油ストーブ、果物、水を届けてくれた。祖父は町内会長をしていたので、すぐに帰らなくてはならなかったが、来たときに本人を抱きしめてくれた。

振り返ってみて

災害を経験したことで新たにしている準備や対策はありますか？

・車のガソリンは常時半分以上入っているようにした。

・モバイルバッテリーを複数準備し、ラジオを2台購入。

・飲料水の宅配を契約。

・定期的にレトルト食品を入れ替えるようになった。

備えをしていて良かったことや反対にこれは不要だと思ったこと

・本人用のオムツや吸水シート（体の下に敷いたり、流延用に使用していたもの）が、他家族の役に立った。本人がいなかったらオムツや吸水シートはなかった。

その他、災害時、どんな人のどんな支援が助かった・こういう支援が欲しかった

・発災時、本人を通所施設で預かってもらったことが助かった。「本人は泊めるので妹たちの世話をして」と言われたのが一番ありがたかった。夜も余震が続いていたが、職員さんが本人に添い寝してくれて、何の心配もなく過ごさせていただいた。

・経腸栄養剤が缶でなく点滴パックのような形態（使い捨て）だとイルリガートルが不要なので消毒不要となり便利だと思う。

・いろいろな方に声掛けしてもらって大変ありがたかったが、支援者同士（ヘルパー、調剤薬局、病院、民生委員、行政）がみんな個々だからつながらない。その連携がしっかりすればもう少し、皆さんの仕事が減るのではないかと思った。また、それぞれがつながることで力を発揮できるのではないかと思った。

災害を経験していない方に伝えたいこと

・「たすけて」と言える人になりましょう。

ひとりだけで頑張らず、誰かに「たすけて」と言えることで、困り事は早く解決します。

・普段の人的ネットワークの大切さを伝えたい。

親同士のネットワークがあってその上での行政の支援だろう。

親同士のネットワークを持っていることで安心できるし、災害時必要な物資、機材を臨機に融通し合うこともできる。人的ネットワークを作るよう行政もネットワーク構築への働きかけをしてもらえることが大切。さらに相談の窓口が明確になっていると良い。

・情報発信：災害時は情報不足で不安を抱えてしまうので、情報が入ってくるのが何より重要。必要な情報発信をしてくれる行政の対応が親にとってはとても役立つ。
 ・移動手段（避難の際）の確保や自宅にいられない時の避難場所をいろいろなパターンで考えておくといふ。普段からの話し合い（家族や

所属施設など）が大切。
 ・信頼できる薬局（本人の医療的ケア物品取り扱い）
 ・高等部卒業時に作成したサポートファイル・アイル（※）は役に立っている。お薬等変わった時はそこだけ入れ替えればよい。
 ・本人を守っているつもりだったが、実は家族

が本人に守られていることを震災で知った。
 （※ サポートファイル・アイル：お子さんの成長等を記録したり、相談機関等で作成した資料などを挟んでおくことで、関わる人にお子さんのことをよりよく理解してもらうためのファイル）

case 02

11歳、若林区、Bさん

聞き取りに応じていただいた方：家族（母）

災害当時の状況

災害の種類 地震（東日本大震災）
 季節・天候 平成23年3月11日（曇り～雪）
 被災した場所 自宅
 医療的ケアの内容 吸引・ネブライザー・経管栄養（胃ろう）
 家族構成 本人、父母（40代）、祖父母（70代）
 家庭の状況 家族の健康状態は問題なし。
 他に介護が必要な家族はいなかった。

要約

東日本大震災時、Bさんの家族は自宅避難し、生活必需品は十分にあった。しかし、電気が5日間停止し、ガスは1か月半不通で、医療的ケアが必要な本人の入浴が困難だった。友人や支援者からの支援があり、2か月後に通常の生活に戻った。災害後、ガスリンと医療用品の備蓄、車のコンセント設置などの準備を行った。災害時には、避難所に行けない人への食料品配布や、入浴だけできる施設の提供が必要であると感じた。

発災時の被害状況

・自宅は半壊だが、住めない状況ではないので避難所等への避難はしなかった。
 ・水は水道が一度も止まらなかった。ガスは1か月半不通だったが、お湯はストーブ(灯油)でわかし、料理もストーブでしていた。電気は5日こなかった。
 ・ガスリンも前日に満タンにしていたので助かった。
 ・困ったのは本人の入浴。清拭はしていたが、胃ろうの周囲がたれたり、肛門に膿胞ができた。近所のオール電化のお宅で入浴させてもらった。

発災時の状況・どのタイミングでどのように動きましたか？

発災直後～72時間（3日後）までの状況

・本人は高等部の卒業式で休日だったので、本人・母・祖父母は自宅にいた。
 ・避難という意識は全くなかった。福祉避難所もないと思っていたし、知らなかった。
 ・本人の物品は十分にあった(2週間分)ので困らなかった。服薬は当時2か所の医療機関。水のない方の家まで水を提供するために運んだりした。
 ・車椅子業者さんが灯油を持ってきてくれた。母の代わりに他の方に水を運んでもらった。

72時間（3日後）～1週間程度の状況

・電気が5日目まで不通だったため、医療機関に行って充電させてもらった。吸引器のバッテリーは2個持ちだが、1日はもたない。当時は吸引回数も1回の吸引時間も長かった(10分程度)が、回数を減らしたり時間を短くして対応していた。
 ・当時の担任の先生が、頻りに様子を見に来てくれた。本人の気分転換になって良かった。

・他の家族（祖父母等）がいたので母が買い出しに行かなくて済んだ。

1週間～1か月程度の状況

・2週間後、調剤薬局や医療機関の看護師から安否確認の電話をもらった。受診はできないが必要な薬剤は、直接調剤薬局から自宅に送ると提案された。

1か月以降～(3か月くらいまで)の状況

・通常の生活に戻るのに2か月くらいかかった。

事前の備え

ハザードマップ等で自宅での危険を確認していましたか？

・いいえ

自宅等で普段から準備していたもの、ことはありますか？

・本人の使用物品については、十分に準備していた。

支援者や地域の人と準備していたことはありますか？

・学校や病院等との関係性は良好で家族会のつながりがある。

振り返ってみて

災害を経験したことで新たにしている準備や対策はありますか？

・車のガスリンは常時、半分以上入っている状態にしている。

・新車購入の際にコンセントを付けた。ダイレクトに吸引器をさして使用できる。

・手動と足踏み式吸引器を準備している。手動吸引器はバギーに常時積んでいる。

・水がない時のために吸引チューブをためて使い捨てできるようにしている。

備えをしていて良かったことや反対にこれは不要だと思ったこと

・医療的ケア関連物品やオムツは十分ストックがあったので良かった。
 ・お尻拭きは家族も使えた。

その他、災害時、どんな人のどんな支援が助かった・こういう支援が欲しかった

・食料品の買い出しや水の配給などの列に並べない人への支援が必要。ボランティアを組織的に活用するなどできると良い。
 ・避難所に行けない人にも食料品等が配布されると良い。
 ・避難所に入らなくても入浴だけできるようにしてもらえると良い。
 ・「ここに行けば充電できる」というマップがあれば良い。

災害を経験していない方に伝えたいこと

・どこにもつながっていない母（家族）に対する支援が必要。未就学児と成人でも通所先がない場合、通所していても母が孤立していて情報がとれない場合等支援が必要。ちなみに、他県から仙台に転居した母は、どこに相談したらよいか分からず施設からココリスの会につながった。

・情報発信は、紙と電子両方必要。二次元コードがあると良い。URLだと入力が面倒。

・医療的ケア児者、重度重複障害児者の家族会「ココリスの会」「ホップメイトみやぎ」がSNSで情報発信を行っているので、当事者家族の方等への情報提供に繋がったら良い。

災害当時の状況

災害の種類	地震（東日本大震災）
季節・天候	平成23年3月11日（曇り～雪）
被災した場所	自宅
医療的ケアの内容	吸引・ネブライザー・経管栄養（胃ろう）
家族構成	本人、母
家庭の状況	母と本人の二人で生活。当時は祖母が近くに 住んでいて、あまり頼んではいなかったが必 要な時は本人の見守りをしてもらっていた。 母が子供の頃からではあるが、祖母の手伝い は必要な状況だった。

要約

東日本大震災時、Cさんと母親は自宅で過ごし、水、薬、栄養補給品の備蓄が役立った。しかし、食料やガソリンの確保は困難で、遠くの友人からの支援が大きく助けとなった。災害後、自身で備蓄を増やし、吸引器の劣化を確認し、薬や栄養補給品を常に持ち歩くようになった。また、避難所や電源供給地点を知るアプリの開発や、普段の生活の延長に災害時の施設があることの重要性を認識した。発電機の必要性も増しているが、購入やメンテナンスは困難である。

発災時の被害状況

集合住宅の5階

- ・二人とも自宅にいて（学校は早く終わる日かお休みだった）、母は仕事に行く準備をしていた。
- ・大きな家具は転倒防止の対策をしていたので、倒れることはなかった。
- ・冷蔵庫など大きなものは部屋の半分くらいは移動していたので、中の物は倒れていた。
- ・ライフラインはすべて止まった。

発災時の状況・どのタイミングでどのように動きましたか？

発災直後～72時間（3日後）までの状況

- ・備蓄はしていたが何をやるにも水が必要と考えて、様子を見に来てくれた祖母に、近くのお店で水を買ってきてもらえるようお願いした。
- ・避難するには持ち物もかなりの量になるため、一人では無理。ガソリンも残り少なかったこともあり、家にいた方が良かった。本人が小2の時に耐震工事をしていたので、崩れることはないという安心感もあった。
- ・仮に、その時手伝ってくれる人がいても避難はしなかったと思う。どこに行っても電気・ガスが止まっていたし、家にいても変わらないこと、当時は人工呼吸器も使っておらず、吸引も頻回でなかったことも要因。電気がなければ命に関わる状況であれば考えたと思う。

72時間（3日後）～1週間程度の状況

- ・本人の水・栄養・薬は1か月分くらいあったが、母の食べるものがほぼなかった。
- ・冷凍庫にあったお肉などをカセットコンロを使って焼いて食べた後は、何もなくなって乾燥パスタを口に入れていた。町内の集会所で備蓄物配布していたが、余震もあって本人をおいていけない、連れて行ってもその後必死な思いで（5階まで）帰らないといけないので、取りに行けなかった。持ってきてくれることもなかった。
- ・ガソリンが少なかったし、上記と同じ理由でスーパー・ガソリンの列には並べなかった。
- ・発災4日くらいで他県の友達がガソリンとバナ

ナなど果物を持ってきてくれたり、食料・ガソリンの買い出しを手伝ってくれた。

- ・主治医から電話での安否確認と薬の処方について連絡があった。ガソリンが入ってから、病院に薬をもらいに行った。

1週間～1か月程度の状況

- ・混乱しているから連絡を返せていなかったが、いろいろな人から連絡は入っていた。他県の友達が発災18日、物流が再開してすぐ位に物資を送ってくれた。大きな段ボールで二つ、近所の人からも集めてパンなど調理のいらぬものや、お菓子などを送ってくれた。甘い物とかも食べたくなっていた頃でこんなにたくさん、とびっくりした。
- ・発災2週間後くらいには仕事に行っている。

1か月以降～（3か月くらいまで）の状況

- ・1か月くらいでだいぶ落ち着いてきた。ガスが出るまで1か月、電気は1週間くらいで復旧した。
- ・普段の生活に戻るまで1か月以上かかったと思う。

事前の備え

ハザードマップ等で自宅での危険を確認していましたか？

- ・いいえ
- ・ハザードマップを見てはいないが、以前水害で自宅周辺が水浸しになり、車が水没したことがあるので、大雨の時は心配しながら外を見ている。

自宅等で普段から準備していたもの、ことはありますか？

- ・医療的ケアに関すること、水・薬・栄養は普段から1か月分位多く残していた。

支援者や地域の人と準備していたことはありますか？

- ・町内会で備蓄をしていたので、毎月二人分のお金を支払っていた。
- ・隣の家の方（高齢夫婦）とは普段から挨拶はしていた。震災時安否確認をし、開かなくなったという扉を開ける手伝いに母が行っている。
- ・震災時、福祉サービスは利用していなかった。

振り返ってみて

災害を経験したことで新たにしている準備や対策はありますか？

- ・町内会の備蓄品に毎月お金を払っていたが、取りに行くことが前提なんだと気づいた時に、取りに行くことができないため、支払いをやめた。その分自身で備蓄するようになった。
- ・吸引器について：震災後NPO法人から手動と足踏みの吸引器配布があり、とっておいた。備蓄品確認の時にあることだけは見ていたが、実際に使ってみることはしていなかった。十数年ぶりに今年使ってみたところゴムが劣化し使えなくなっていた。あればよいものではなく、使ってみないとだめだなと思った。手動の吸引器は買い替えている。
- ・車に注入のセットと注射器とルートのセットは入れている。忘れたら困るもの、途中で調達ができないものはいろいろなバッグに入れている。
- ・出かけた先で被災する可能性もあると人に言われて気づいた。それ以降旅行時、薬は旅行日数の倍は持つようになった。ちょっとした外出の時も薬1週間分持つようになった。栄養も必要分+1本持ち歩いている。吸引器も持たずにいることもあったが、それはなくなった。
- ・知らない土地の避難所や電源を貸してくれるところは分からない。そういう場所が分かるアプリができると思う。

備えをされていて良かったことや反対にこれは不要だと思ったこと

- ・水、栄養、薬があったので、あまり心配になることはなかった。
- ・備えていていない、と思うものは特にない。
- ・携帯電話もラジオの手動式充電器があったため困らなかった。

その他、災害時、どんな人のどんな支援が助かった・こういう支援が欲しかった等

- ・町内の備蓄品配布は、取りに行くことが前提だった。みんな大変だし混乱もしていたので難しいと思うが、届けてくれるということはなかったし、安否確認なども特になかったと思う。配布されるものを取りに行ってもらえたら助かったと思う。

・近くの人たちはみんな被災者、遠くに住んでいる友人の方が状況を冷静に見れているのかもしれない。遠くの友人が沢山助けてくれた。ガソリンや食べ物を届けてくれたのは助かった。

・普段から使っている場所（通所施設など）が福祉避難所になったらいいのになと思う。

近くの避難所は小学校だが、行ったとしてもどうにもならない。今は特に人工呼吸器もあるし引越すくらい荷物が必要になる。5階から下ろすだけでも大変。普段の生活の延長に災害時の施設があれば普段から預けているものもあるので、必要な物だけ持っていけば良くなる。持っていくものを減らすことができるし、避難できると思うと普段から置いておく物も変わると思う。

・寒い時期だったからまだよかった。夏だったら避難すると思う。温度が調節できない。

あの時期でよかった。

・備える必要があるけれど備えていられないのは発電機。値段とメンテナンスを考えると簡単に購入できない。今は夜間呼吸器を使っており、今までは無くても生死には関わらない状態だったが、二酸化炭素の排出悪く、今まで以上に呼吸器に頼る機会が増えた。災害の期間が長くなった時に大丈夫かなとは思。欲しいとは思いつつ思っているし、補助があれば…。電気がないと避難しないといけないかもしれない。

呼吸器・発電機の必要性は我が家では今までより一段階上がった。避難するとしたら病院しかない。発電機はどんなタイプがいいのかも分からない。ガソリン、カセットコンロがいいのか。容量、どのくらいの時間もつのか。ここにいったら充電できます、みたいなところも近くがあれば…。

災害を経験していない方に伝えたいこと

・薬と栄養と水は備蓄しましょう。

・沿岸で被災した友人の話で、自宅と車が流された方。栄養も流され、いつもと違う栄養を注入したら下痢をして大変だったよう。流された車を見つけ、車にもいくつか物品を入れていたのでその物品を使うことができた。備蓄しておく物品を分散しておくことも大切だと思った。自宅がだめになった時、代わりの物がないと大変。施設や車など分散しておくことでどれかは使えるという状況を作っておくことも大切。

case 04 20歳、宮城野区、Dさん

聞き取りに応じていただいた方：家族（母）

災害当時の状況

災害の種類	地震（東日本大震災）
季節・天候	平成23年3月11日（曇り～雪）
被災した場所	通所施設
医療的ケアの内容	気管切開・吸引・ネブライザー・経管栄養（胃ろう）
家族構成	本人、父、母

要約

東日本大震災時、Dさんとその家族は、通所施設にいたDさんを迎えに行き、自宅に戻り、敷地内で車で過ごすことを選択しました。医療的ケアは車内で行い、薬や医療物品は予備を用意していました。災害後数日間は車で過ごし、その後、親戚の家に避難しました。電気が復旧した後自宅に戻りました。経験から、ガソリン、灯油、酸素ボンベ等の備蓄、車やバッグに必要な物品を一式入れておくこと、家族間での情報共有、地域との連携等の重要性を認識しました。

発災時の被害状況

・父：たまたま仕事が休みで家にいました。

・母：美容室でカラーリング後、髪を洗おうと洗髪台で横になった瞬間に揺れました。

・外に出たら、市営バスや電柱が揺れていました。

発災時の状況・どのタイミングでどのように動きましたか？

発災直後～72時間（3日後）までの状況

・地震後、本人は通所施設にいたのでまずは大丈夫と思い、母はカラー剤も流さずそのまま帰宅しました。

・自宅はプロパンガスだったためガスの使用は可能で、水道も止まっていなかったため、まずは急いで髪を洗いカラー剤を流しました。

・その後、自宅にいた父はそのまま自宅に残り母が本人を迎えに通所施設へ行きました。

・本人を引き取り、帰りにスーパーに寄り電池や懐中電灯を買いました（商品は表の方に出ており、また、レジが動かなかったため入口で電卓で計算して売っていました）。

・父より「津波が来たから帰宅不可」と連絡がありました。その後しばらくスーパーの駐車場まで車で待機しました。避難所も考えましたが、寒い人が多いと思い、車にいる方が良いと判断し

ました。水が引いたので20時30分頃に自宅に戻ることができました。

・その後は自宅で過ごすことも考えましたが、また津波警報等逃げなければならない状況になるかもしれないと考えた時に、本人を自宅から車に移すことを考えると、車の中で過ごした方が移動の負担もないと思い、そのまま自宅敷地内の車の中で過ごしました。

・翌日からは、本人は車で過ごし、家族は明るい時間に自宅でご飯を食べたりトイレを使用したりして過ごしました。数日の間に何回かサイレンが鳴り、車で安全な場所に移動したりしました。

・医療的ケア（吸引など）も車で実施しました。

・日中は日差しがあったため、車内は暖かく心地よく過ごせましたが、夜から朝にかけては下からの冷えを感じました。

・数日後にはガス屋さんで点検に来てくれ、ガスの残量が十分あるので心配ないと教えてくれたので、とても安心しました。

72時間（3日後）～1週間程度の状況

・自宅敷地内の車で過ごしていることを知り、4～5日後くらいに、近所の人から心配してくれ、避難所（学校）で保健室等に入れてくれるかもしれないと教えてくれたため、避難所である近所の小学校に行きました。

そこで事情を説明したところ、職員より、避難所の衛生状態が悪いことなどの説明があり、今現

在本人が元気で過ごせているなら、今のまま過ごした方が良いこと、もしくは医療機関などに相談したほうが良いと思われると言ってくれました。状況を判断してくれて適切なアドバイスをくれた職員に感謝しています。医療的ケア児のことが分かる職員がいてくれて良かったと思っています。

・車では6日間くらい過ごしました。その後、定期受診の日が近づき薬の残りがわずかになったため、かかりつけ医に電話したところ、診察はできませんでしたが、薬を処方してもらうことができました。そのまま、他区に住むいとこのところに行き、泊めてもらいました。そこでやっとテレビを見ることができました。その移動中、ほんの少ししか離れていない地域では皆普通に過ごしている様子があり、こんなにも状況が違うんだ、と思いました。

・車いす業者さんが電話をくれて灯油を持ってきてくれたりしました。

1週間～1か月程度の状況

・3月20日から21日くらいに自宅に電気が戻ったため、他区のいとこ宅から自宅に戻りました。

・その後は少しずつ日常に戻っていきました。

事前の備え

ハザードマップ等で自宅での危険を確認していましたか？

・いいえ

自宅等で普段から準備していたもの、ことはありますか？

- ・医療的ケアの物品、栄養剤等、薬は1週間~10日くらい予備があるようにしていました。
- ・通所先の施設には3日分の薬などを常備していました。

振り返ってみて

災害を経験したことで新たにしている準備や対策はありますか？

- ・被災当時と現在では本人の医療的ケアも変わっているので、今だと酸素ボンベも必要になります。車にはガソリンも十分に入れておくようにしています。灯油なども必要です。
- ・車に一式予備の物品を入れてあります(医療物品だけでなく水等も)。またバッグに薬等も含めワンセットにしておくことで、災害時にまずこれだけは持っていく、と決めておくとうれしいです。車にはカイロ、毛布、ブルーシートなども入れてあります。

備えをしていて良かったことや反対にこれは不要だと思ったこと

- ・普段から、車に乗せるときは、シートを倒し横になった状態で乗るようにセットしていました(福祉車両等で車いすごと座ったまま乗るものではなく本人にとっては痰がらみが増えるため)。
- ・震災時にも同様の状況で車中で過ごすことができたので、本人も普段からの環境であったため負担も少なかったのかもしれない。

その他、災害時、どんな人のどんな支援が助かった・こういう支援が欲しかった等

- ・避難所である学校に相談した時に、きちんと状況を判断し、寄り添って助言してくれた避難所職員にはとても感謝しています。

災害を経験していない方に伝えたいこと

- ・「本人の命を守るために絶対に必要な物(薬・栄養剤・医療物品・オムツなど)」を普段から準備しておくとうれしいです(自宅で被災するとは限らないので、車の中やバッグにも)。

準備しておくとうれしいです(自宅で被災するとは限らないので、車の中やバッグにも)。

準備するときは水害にも備え、ジッパーつきのビニール袋に入れておくと、より安心です。家族の中でも共有しておくことが大事です(このバッグは必ず持って行く！等)

- ・足踏み吸引器等準備はしても、準備したことで安心し、しまいっぱなしにすることなく、使ってみることが大事です。

・母同士のネットワークが大事です。「つながる」ことがとても大切です。普段から地域の人に状況を話しておく等、現状を外に伝えていく、自分たちで発信していくこともとても大事です。地域の学校とも普段から情報をやりとりしておくのも良いと思います。

- ・避難所=安心して過ごせる場所、とは限りません。他の場所に移動することが本人の負担になることもあるので、自宅で過ごす選択もあります。状況はそれぞれ違うので、本人がより安心して過ごせる環境を考えることが大切です。

case 05

9歳、青葉区、Eさん

聞き取りに応じていただいた方：家族（両親）

災害当時の状況

災害の種類	地震（東日本大震災）
季節・天候	雪がちらついていた
被災した場所	自宅
医療的ケアの内容	人工呼吸器・気管切開・鼻咽頭エアウェイ・酸素療法・吸引・ネブライザー・経管栄養（胃ろう）
家族構成	本人、父（48歳）、母（43歳）、姉（10歳）、妹（4歳）
家庭の状況	健康状態は良好

要約

地震発生時、Eさんの家族は停電と断水に直面し、医療機器の充電や食事の準備に困難を経験した。地震直後から1週間は、近所の人々の助けを借りて過ごし、1週間から1か月は、新たに発電機やポリタンクを購入した。1か月後から3か月までは、生活は徐々に正常化した。災害を経験したことで、家族は常に1か月分の薬を準備するようになり、ポータブル電源の購入を検討している。また、近所との関係や日常の準備の重要性を認識した。

発災時の被害状況

- ・停電(3日間)
- ・断水(最初は出ていたが3日目にチョロチョロになり、4日目に断水2日間)
- ・子供部屋の小物は落ちたが、大きなタンスなどは倒れず。

発災時の状況・どのタイミングでどのように動きましたか？

発災直後~72時間(3日後)までの状況

- ・父は出勤前だったので自宅におり、ベッドで寝ていた本人に覆いかぶさり、ベッドの脇にあるタンスを抑えた。妹は幼稚園から帰宅しており、母と一緒にベッドの下に隠れた。
- ・姉は小学校におり、近所の同じ小学校の保護者が、学校に迎えに行き、担任へ事情を説明。近所の方が自宅まで連れて帰ってきてくれた。
- ・直接、医療機関へ、医療機器の充電をさせてもらえないか問合せに行ったが(入院させてくれないかとの期待もあったが…)、医療機関では、「沿岸部からの受け入れていっぱいいっぱいな状態。非常電源がほぼ使えないので、酸素なども

みんなに供給できるかわからない状態のため、充電してもらっては困る。明日になれば手配できるかもしれないので、手配ができれば受け入れることもできるかもしれない。なんとか自宅で頑張れるなら自宅で」との説明だった。

- ・余震もあったため、インバーターを使用し、一晩家族全員で車の中で過ごした。

72時間(3日後)~1週間程度の状況

- ・3日目あたりから、水が出なくなり2日間くらい断水となった。近所の井戸を持っている方が「電気が来たので水を汲めるよ」と声をかけてくれて、水をくませてもらった(トイレ、食器洗い、注入ボトル洗浄、吸引器の洗浄などに使用)。
- ・食事は、冷蔵庫にあったものを食べた。近所で実家に避難する方がおり、冷凍食品を分けてくれた。プロパンガスだったため、火を使って調理することができた。4日目くらいからは、近所の酒屋さんも開き、野菜などを買うことができた。
- ・自宅には、カイロ、ポリタンク、延長コード(5m~10m)、マスク、石油ストーブがあったので、使用しながら過ごした。

1週間~1か月程度の状況

- ・ネブライザーを1週間使用していなかった

めか、加湿できず、本人は体調を崩し、気管炎を起こしてしまい、3月18日から1週間程度入院。

- ・水は極力使わないようにして過ごした。2週間過ぎるとある程度お店も開き、あちこち買い出しに行った。
- ・発電機やポリタンク、携行缶を新たに購入。携帯のアラーム(地震情報)に敏感になり、なるたびにドキッとしながら過ごした。

1か月以降~(3か月くらいまで)の状況

- ・小学校や幼稚園はゴールデンウィーク明けから再開。父親は4月末から仕事を再開。買い物に行くのは苦勞しなくなった。乾電池の予備がなくなり、100均に勤めているママ友に頼んで購入した。
- ・医療機関から、足踏み式の吸引器をもらった。

事前の備え

ハザードマップ等で自宅での危険を確認していましたか？

- ・いいえ

自宅等で普段から準備していたもの、ことはありますか？

・医療的ケアに関すること：準備していなかった。

支援者や地域の人と準備していたことはありますか？

・町内会の避難訓練が年に1回程度あるが、参加したことはなかった。

振り返ってみて

災害を経験したことで新たにしている準備や対策はありますか？

・常に1か月は過ごせるように薬以外準備している。

・ポータブル電源があるといいなとは考えている(助成があるといいな)。

備えをしていて良かったことや反対にこれは不要だと思ったこと

・備えをしていなかった。

その他、災害時、どんな人のどんな支援が助かった・こういう支援が欲しかった等

近所の方からの水や食料の共有。親戚からの食料や灯油、ガソリンの供給。

・緊急時に自宅以外で、水があって、電気があって、本人が過ごせる場所があると良かった。

・子どもたちがストレスを感じて過ごしていたと思うので、ストレスを発散できるような場所

があったらいいなと思った。

災害を経験していない方に伝えたいこと

・お金に余裕があるなら、ポータブル電源は一つ用意しておいた方がよい。

・日ごろからのご近所付き合いは大事。

・普段から、同じものを同じように使えるような準備や練習をしておいた方がよい。

・車のインバーターなど役に立つものは用意しておいた方がよい。

・非常食など事前の準備も大事。

case 06

学校、教員、Fさん

災害当時の状況

災害の種類	地震(東日本大震災)
季節・天候	曇り～雪
被災した時間	14時46分
医療的ケア児人数	10～12名(小学生・中学生・高校生)
ケア種別	気管切開・酸素療法・吸引・ネブライザー・経管栄養(胃ろう・経鼻経管)
職員状況	100名弱(教員、講師、実習助手、看護師、事務、給食等)

要約

3月11日は卒業式当日で、東日本大震災発生時刻、校内に児童生徒はいなかった。本校は指定避難所とはなっていないため、児童生徒とその家族が一時的に避難に訪れたが、物資・人員とも限られた中での対応だった。

発災時施設に利用者などはいましたか

卒業式当日で、高等部生徒は午前中で下校、小中学部の児童生徒は臨時休業日だった。

発災時の状況・どのタイミングでどのように動きましたか？

発災直後～72時間(3日後)までの状況

・発災時は職員室で事務作業をしていた。揺れが収まった後に、校舎の外に避難した。

・余震も多く、当日は子供の安否確認までは困難だった。

・管理職から「必要な人は、まずは自分の家族の安全を確認しなさい。」と伝えられ、いったん自宅へ戻った。

・翌日、学校へ向かうと、ちょうど担任している子供と家族が車で来校しており、お互いの無事を喜んだ。

・担任する子供宅へ家庭訪問(安否確認)を行い、本人、ご家族の無事を確認した。避難所には行かず自宅にいたこと、発災時、本人は放課後等デイサービス利用中だったこと、放課後等デイサービスの職員が自宅まで送り届けてくれたことを保護者から教えてもらった。

72時間(3日後)～1週間程度の状況

・勤務中に、職員同士で情報交換をすることができた。家庭訪問や、電話等、その時にできる方法で、担任する子供とその家族の無事を確認し

ていたようだった。

・学校では当時から災害時に備え、各家庭からおむつや災害時の保存食等を預かり保管していたが、それを引き取りにくるご家庭もあったと記憶している。

1週間～1か月程度の状況

・校舎の外壁等には被害があったが、校舎内の片付け等、学校を再開する準備を進めていった。

・4月から学校を再開した。余震などの心配はあったが、子供たちは元気に登校してくれた。

事前の備え

ハザードマップ等で施設での危険を確認していましたか？

・大型の地図に、子供たちの自宅位置をシールでマーキングしたものを作成していた。

・校地内は、日頃から安全点検等行っていた。

施設等で普段から準備していたもの、ことはありますか？

・医療的ケア関係では、吸引器(手動はなかったと思う)、アンビュー、酸素ボンベは備えていたと思う。

・震災前から、災害時の非常食やおむつ等を各家庭から預かり保管していた。年1回、ご家庭で中身の確認と更新をお願いしていた。

医療的ケア児者及びご家族、他の支援者、地域の方等と普段から準備していたこと

・学校では避難訓練や引き渡し訓練等を行っていた。

振り返ってみて

災害を経験したことで新たにしている準備や対策はありますか？

・簡易発電機等、災害時に使える備品が整理された。

・職員の災害対応訓練等が見直された。

関係機関との連携の中で、助かったことや困ったことはありますか？

・情報もない中、まずは子供たちのこと、学校のことを考えることで、自分は精いっぱいだった。

備えをしていて良かったことや反対にこれは不要だと思ったこと

・限りはあったが、その時に学校にあった災害用備品等が役に立ったと思う。

災害を経験していない方に伝えたいこと

・人とのつながりはとても大切だと感じた。

・スイッチを押せば明かりがつく、蛇口をひねれば水が出る。それは当たり前ではないことを痛感した。ある程度の備蓄をする、災害時の状況をシミュレーションしてみる、疑似体験を試みる等、平時から備えておくことはとても大切だった。

災害の種類	地震（東日本大震災）
季節・天候	曇り～雪
被災した時間	14時46分
医療的ケア児人数	A…1名 B…3名くらい（高校生）
ケア種別	人工呼吸器・気管切開・酸素療法・吸引・ネブライザー・経管栄養（胃ろう・経鼻経管）
職員状況	A…看護師8名（プロパー、パートあわせて） B…看護師12～15名（プロパー、パートあわせて） ※当時は支援学校に毎日看護師を派遣していた。 →県立支援学校で常勤看護師の雇用が無かった時代

要約

東日本大震災時、訪問看護ステーションの看護師は、被災直後から72時間以内に緊急性の高い患者の安否確認を優先し、必要なケアを提供した。ガソリンや清潔保持のための熱湯など、地域の協力を得て対応した。震災後1週間から1か月程度では、ケア時間を調整し、職員の復旧時間を確保。4月には通常の業務に戻った。災害時のマニュアルは存在せず、事前の備えもなかったが、経験から1～2日が大切であると学んだ。

発災時施設に利用者などはいましたか

いなかった ※訪問サービスのため

発災時の状況・どのタイミングでどのように動きましたか？

発災直後～72時間（3日後）までの状況

【1日目】

・発災直後、利用者宅で被災した看護師と移動中に被災した看護師とがいた。事務所は所長と事務の2名のみ。
・当時、利用者宅や移動時に被災した際のマニュアルはなかった。そのため、予定通りケアに行く看護師もいたが、多くは一旦事務所に戻ってきていた。
・ケアに行く選択をした看護師はケア内容的に「行かなきゃいけない」と考えた模様。事業所に戻った看護師は、近所のケースの家族から借りた自転車で安否確認を実施。
・安否確認については、全然動けない方や30分ごとの吸引が必要な方など、事業所として緊急性が高い人を優先的に回り、当日中に安否確認が来ている。また、海の方は距離的に行けなかった。
・自転車を利用した理由としては、当時4号バイパスが全く動かなかったことも理由の一つ。
・安否確認時に建物からの移動が必要な方については、近所の方に訪問看護師が声を掛けて手伝ってもらうなどしていた。布団店から布団を借りるなどしている。
・吸引が頻回な方には、シリンジで吸引する方法などを家族に伝えるなどし、医療機関に繋がるまでの時間を稼いだ。
・子どものケースについては、誰か親はいるだろうということで回らなかった。育児についての困難さよりも、呼吸に関わる分、吸引が必要な方を優先的に回るなど、ケアの必要さを事業所として判断していた。
・安否確認は1時間くらいで終わり、その後一旦職員自身の家族の安否確認後、再度事業所に戻ってきている。

・この時点で津波が来ているとの情報は知らず、21時頃に帰宅してから知った。
・後日談にはなるが、海沿いに住んでいた寝たきりの方はエアマットごと消防車に乗せられ運ばれ、小学校の4階まで人力であげられ助かった方がいた。震災関連死はあったが、津波で亡くなった方や職員はいなかった。
・震災直後に訪問した方で、公民館などで障害者も受け入れてもらえるなどの情報提供をしたが、最後まで自宅にいた方もいた。その方については、ヘルパーと訪問看護師のどちらかが1日1回は様子を見に行っていた。

【2日目】

・前日に安否確認が出来なかった方の安否確認を行う。
・出勤については、出てこられる看護師が出勤するという形であった。
緊急性の無い方の家に訪問した際に、前日にベッドのリクライニングを上げたままだった方がおり、職員が偶然持っていた車のシガーソケットからの変換機を使い、近所の方に延長コードを借りてリクライニングを戻したことがあった。
また、津波の情報を元に、危険と予測される地域へは訪問はしなかった。

【3日目】

・もともと事業所の休所日なので休み。

72時間（3日後）～1週間程度の状況

・月曜日（4日目）は通常通り出勤となっていたが、どのように通常に戻すのかという話も出ていた。
・呼吸器などのケアが必要な方の訪問は適宜行っており、電力の問題で結局は自力で生活を続けていたが、早い段階で病院に移るなどしていた。在宅酸素の人はその時は特定の医療機関に多く集まっていた記憶がある。
・ガソリンについては、近所のスタンドの方が裏からこっそり入れてくれて「半分までね」とガソリンを融通してくれたので、3日目以降に燃料に困ることはなかった。
・清潔保持の部分では、事業所がプロパンガスだったので、事業所でお湯を沸かしてポットで訪問に持っていき、訪問先で適温にし、清拭など

に使っていた。

・避難所に避難した人はほとんどいなかった。皆さん大体自宅にいた。
→家が壊れなかったのが大きいと思われる。福祉避難所については知らなかったし、知っていたとしても使い方が分からなかった。
・出勤状況については、看護師が揃わなかったということはなかった。ただ、職員の子供に関しては、近所の方が見てくれるなどの目に見えない助け合いのお陰で仕事に行くことが出来ていたと思う。

1週間～1か月程度の状況

・この頃になると葉のセットだけなどの軽めの方についても、安否確認のため訪問指示の回数より多く訪問をしていた。
→まだ電気が復旧していない地域は連絡網が回復していなかったため。
・また、職員の復旧の時間も確保するため、ケア時間をずらすなどして調整し、午後から帰宅できるようにするなどしていた。食料などは自分たちで確保する必要もあった。
・特に連携した機関はないが、母体の法人が全国組織の中の一部であったことから、ケアに必要な支援物資などに困ることは無かった。ある医療機関では半分避難所のような状況で炊き出しなどもしていた。
ある法人では集めた物資をどう配ったら良いかで困ったと後から聞いた。

事前の備え

ハザードマップ等で施設での危険を確認していましたか？

・いいえ

施設等で普段から準備していたもの、ことはありますか？

・ない、BCP(※)もなし
(※BCP(ビーシーピー)：業務継続計画。自然災害や感染症のまん延など不測の事態が発生しても、重要な事業を中断させない、または中断しても可能な限り短い時間で復旧させるための方針、体制、手順等を示した計画のこと)

振り返ってみて

災害を経験したことで新たにしている準備や対策はありますか？

- ・対応マニュアルの準備
- ・安否確認、参集の条件、災害時の動き(二人一組)、持ち出しバッグ。

関係機関との連携の中で、助かったことや困ったことはありますか？

- ・電話が通じなかったため、連携はすぐには無理であった。

- ・本当にケアなどで支援や調整が必要な方は1～2日が大切だった。
- ・退院時には密に連携をとった。

備えをされていて良かったことや反対にこれは不要だと思ったこと

- ・備えていなかったのわからない。

災害を経験していない方に伝えたいこと

- ・ルールを決めておくことは大事。

- ・災害が起きた時の様々な場面を想像した動き方。
- ・自分や自分の家族が安全でない時は無理して仕事に来ない。
- ・連絡が取れない時にどのように動くか等々

case 08

相談支援事業所、相談支援専門員、Hさん

災害当時の状況

災害の種類	地震(東日本大震災)
季節・天候	曇り～雪
被災した時間	14時46分
医療的ケア者人数	3～4名くらい(下が20代、上が60代)
ケア種別	人工呼吸器・気管切開・酸素療法・吸引・ネブライザー・経管栄養(胃ろう)
職員状況	【相談支援事業所として】全部で4名(正職員の相談支援専門員2名、常勤嘱託の相談支援専門員が1名と相談員が1名) 【障害者福祉センターとして】全体統括の所長1名 【自立訓練「市の委託事業」】正職員3名、事務員1名、嘱託5名、派遣ドライバー1名 【生活介護「市の委託事業」】正職員4名、パート2名 【公募による運営場所の提供】(おそらく)正職員3名、嘱託2名

要約

東日本大震災時、医療的ケアを必要とする利用者は、電源の見通しに合わせて医療機関に入院し、ほとんどは救急車で運ばれた。福祉避難所のスタッフとして動きながら、安否確認の訪問や様子伺いの電話連絡を行った。入院後の医療的ケア利用者の退院調整を病院と連携して行った。災害を経験したことで、安否確認リストの定期的な見直しや関係機関との連携について改めて考えるようになった。

発災時施設に利用者などはいましたか

- ・自立訓練2～3名、生活介護6名うち医療的ケアのある方は0名
- ※その他に貸館事業の利用者もあり、10名を超える程度の貸館利用団体の参加者が所内におり、避難誘導をしていた。

発災時の状況・どのタイミングでどのように動きましたか？

発災直後～72時間(3日後)までの状況

- ・発災時、嘱託職員の1名が東京出張中で2名が外出中。
- ・事務室には所長と2名のみであった。各事業にはそれぞれ職員がおり支援中。
- ・地震の揺れが収まった後、館内の避難誘導を行う。
- ・貸館の利用者は各自自力で帰宅し、各事業の利用者はそれぞれの職員が対応しており、被災後1時間後くらいではほぼ全利用者の家族と連絡がつき、送迎車で各自を送り始める。翌日まで生活介護の1名だけが連絡がつかないため、職員と避難所で一晩過ごすこととなる。
- ・その後、比較的早く外出中の2名が戻り、東京出張中の職員とは電話で連絡がついたため、相

談員の安否確認は比較的早く終了した。

- ・センターが福祉避難所になる場所であったため、開設の準備の手伝いがあり、通常の相談事業としての機能は一旦停止していた。そのため、当日に利用者の安否確認は行えなかった。※医療的ケアのある利用者などは他サービスが入っている方であった。
- ・翌日から利用者の安否確認を行うが、他のサービスに繋がっている方は事業所に確認を行う形で実施。
- ・医療的ケアのある利用者については電気が無いということで、バッテリーがもつかどうかが入院になるかどうかの一つのラインであった。なので、今思うとバッテリーが大丈夫なら入院できなかった可能性もあり、病院が在宅での緊急度を勘案して入院の可否を判断してくれていたと思われる。
- ・今は個人で発電機やソーラーパネルなどを準備しているので、震災時よりはすぐに入院になる方は少ないかもしれない。
- ・電源の見通しに合わせて、医療機関にみなさん入院されていたが、全員かかりつけの病院ではないが受け入れてもらった。入院の調整については、往診が行ってくれており、往診が入っていない場合は家族が病院と調整を行っていた。
- ・概ね翌日には皆さん入院されていたが、2～3日後に入院された医療的ケアの方もいらっしゃった。バッテリーをどのようにもたせてい

たのかは分からないが、車などから電源をとっていたものと思われる。

- ・入院手段としては、自力で行くか救急車かしかないが、ほとんど救急車が来てくれて入院されている。
- ・相談員の動きとしては、安否確認のほかに福祉避難所のスタッフとしての動きも求められたため、夜勤なども行った。
- ・福祉避難所スタッフとしての動きをしながら、安否確認の訪問や様子伺いの電話連絡を行っていた。

72時間(3日後)～1週間程度の状況

- ・相談員の動きとしては、3日目以降も、福祉避難所のスタッフとしての動きも求められたため夜勤なども行う必要もあり、福祉避難所のスタッフとしての動きをしながら、安否確認の訪問や様子伺いの電話連絡などの相談員としての業務を行っていた。
- ・医療的ケアのある方は入院された後であるため、業務としては通常の相談業務というよりは話し相手としてのやり取りが多かった。

1週間～1か月程度の状況

- ・センターとしては福祉避難所を4月末まで続けていたが、相談事業としては3月末、2週間後くらいから通常業務に戻そうという流れとなり、職員4名中3名が通常業務に戻っている。
- ・通常業務のほかに、福祉避難所に避難されていた方のサービス調整や住環境についての調整

や、市から直接依頼があり県外避難していた医療的ケアのある方のサービス調整を行っている。

・福祉避難所に来た方は、生活全体を立て直さなければ戻せなかったため、医療や福祉サービス以外にも町内会などの地域の方とのやり取りも必要であった。

・また、母子の医療的ケアのある方も福祉避難所に来たが、来た当初はすべてのケアを母が担っており、不安や疲労、緊張感からか表情がすごく硬かったが、センターは看護師2名も避難所スタッフとしてケアにあたっており、看護師がケアを手伝うことで次第に母の表情が和らいでいった。

・通常の相談業務の中では、入院されていた医療的ケアのある方の退院調整を病院と連携して行っている。

1か月以降～（3か月くらいまで）

・ゴールデンウィークあたりから、相談事業所としての通常業務に戻っている。

事前の備え

ハザードマップ等で施設での危険を確認していましたか？

・いいえ

施設等で普段から準備していたもの、ことはありますか？

・安否確認リストは準備していた。一人暮らしの方や高齢の家族がケアしているなど。

医療的ケア児者及びご家族、他の支援者、地域の方等と普段から準備していたこと

・支援者とは普段の相談としてのやり取りの中でなんとなく話していたところはあったが、明確ではない。

・地域の方とは全くそういった話はしていなかったため、もっとコミュニケーションをとっておけば良かった、大事だったと思う。

振り返ってみて

災害を経験したことで新たにしている準備や対策はありますか？

・準備や対策などの部分で意識として変わったところはある。

関係機関との連携の中で、助かったことや困ったことはありますか？

・上記の影響を踏まえて、安否確認リストの定期的な見直しや関係機関との連携について改めて考えながらやっている。

・通常の支援が出来なかったが、関わっている人が多ければ何かしらの支援が入ることに繋がった。

・水害などの場合は、近所のネットワークが大切だと感じた。

・平時のケアが受けられない場合は謝るしかなかった。

・福祉避難所としては、隣が病院ということで服薬の処方などで助かった部分はあった。

災害を経験していない方に伝えたいこと

・想定外はあるという前提で、準備をされていて悪いことは無い。ハイリスクのケース（医療デバイスが多い方、自宅で受け入れができない方など）を中心とした検討をしていくことが必要。

case 09

訪問入浴、管理者、Iさん

災害当時の状況

災害の種類	地震（東日本大震災）
季節・天候	晴れ～曇り～雪
被災した時間	14時46分
医療的ケア児者数	児…5～6名（中学生） 者…5～6名、ALS患者15名程度（20代、30代、40代、50代以上）
ケア種別	人工呼吸器・気管切開・酸素療法・吸引・ネブライザー・経管栄養（胃ろう・腸ろう・経鼻経管）・中心静脈栄養
職員状況	職員は約20名。訪問メンバーは看護師、オペレーター（機械操作：ヘルパー）、ヘルパーの3名体制。（看護師7～8名、オペレーター7名、ヘルパー7名、パート勤務等あり）

要約

東日本大震災時、職員はガソリン不足により自転車で行き、断水により訪問入浴業務は行えず、利用者の様子確認や必要物品の配達に努めた。災害後72時間から1週間は、家族との連絡が復旧し、東京本社からの物資を配布。1週間から1か月は、医療機関との連絡や発電機の借用、買い物代行を行った。1か月以降、水・ガス復旧により入浴サービス再開。災害後の影響として、体験者と未体験者の備えの意識に差がある。新たな対策として、3日分の必要物品の備蓄、発電機の準備、避難訓練、避難用品の確認などを行っている。

発災時施設に利用者などはいましたか

・いなかった（事務所におり、建物から外に出て、職員の携帯は誰も繋がらず、職員は時間はかかったが職場に集合できた）

発災時の状況・どのタイミングでどのように動きましたか？

発災直後～72時間（3日後）までの状況

・発災直後、3日間、1日20～30件ガソリン無く車が使えないため、自転車で訪問した（利用者が100名程度いたため）。

・断水のため、訪問入浴の業務は行えず本来業

務ではないが御用聞きにまわった。当日に入浴予定だった方々には1件1件訪問して入浴できない旨伝え様子も確認した。

・何かあれば、ケアマネジャーに連絡して対応してもらった。

・高層階の方が、水の配給を受けるために下に降りるとエレベーターがないため登れないという訴えがあり、高層階まで階段で水を運んだ。

・メールは電話よりつながりやすかったため家族とメールで連絡をとりあった。

・電気ガス水道が復旧しなければ業務はできないため、業務外のことをやった。

・命をつなぐためにやったと思う。

72時間（3日後）～1週間程度の状況

・メールが届くようになり、家族と連絡が取れるようになってきた。

・自転車で訪問していた。

・東京本社より、水やカイロが届き、訪問して届けていた。

・医療的ケア児は病院に行った人が多かった。1週間～2週間程度。電気の復旧とともに戻ってきた。

1週間～1か月程度の状況

・連携した機関は、医療機関への報告。消防署で電源を借りる（吸引器の充電）。

・近くの工事現場から発電機を借りた。

・ケアマネジャー・ヘルパー事業所などにも連絡をしていた。

・買い物の代行もした。

1か月以降～（3か月くらいまで）

- ・他地域へのボランティアを行っていた（一日10～15名）。
- ・1か月以降、水・ガスが復旧したため、入浴サービスを提供できるようになったが、職員がガソリンなく、通勤等は会社で送迎したりしていた。

事前の備え

ハザードマップ等で施設での危険を確認していましたか？

- ・いいえ

施設等で普段から準備していたもの、ことはありますか？

- ・入浴中、地震になったらの想定で訓練はしていた（1年に1回）。研修で必須になっている。
- ・震災2～3日前の地震が入浴サービス中に起きたため、事前の訓練となった。

振り返ってみて

被災後、今も残っている影響はありますか？

- ・体験した母は、災害に対しての備えが必要であると思っているが、体験していない母はそう思っていないので、災害時の考え方に差がある。

災害を経験したことで新たにしている準備や対策はありますか？

- ・3日分の必要物品は備えている。
- ・おむつはなくなる前に余裕をもって買っている（母たち）。
- ・水もペットボトルを箱で買っている。
- ・発電機を用意している（事前に充電するタイプ、太陽光で発電：吸引器、呼吸器など連続で8時間使っても8割程度は残っている）。
- ・ALSの方は1年に1回、避難できるようにケアマネージャー中心にカートの確認や訓練をする人もいる。
- ・家の見取り図を貼っている。
- ・避難できるようカートの中に発電機の使い方を写真で用意する。
- ・使用期限のある物は別に分けて分かるようにする。
- ・カートの中身は月に1回毎月1日に確認。
- ・全ての支援者が確認できるように工夫している。

関係機関との連携の中で、助かったことや困ったことはありますか？

1週間～1か月のところに記載。

備えをしていて良かったことや反対にこれは不要だと思ったこと

- ・小物（綿棒など）普段は使用しているが、あまり使わなかった。
- ・震災前はあまり備えがなかった？定期的にショートステイやレスパイトを利用する方は、そのための物品を用意している。

災害を経験していない方に伝えたいこと

- ・母たちから聞いた後日談として、震災後、子供はこわくて泣いている。呼吸器のストッパーをかけていなくて、カニューレが抜けそうになった。ベッドは固定しているが呼吸器は移動したりするため、かけていなかった。
- ・起こってから準備はできないので準備はしておくべき。直ぐに出られるように準備しておくことに損はない。別に大丈夫、もうこない、と思わないで。
- ・ガソリンがなくて移動が大変であった。
- ・水はとても大事。

調べてみよう！

あなたのお家は安全？どんな時に避難が必要？



ハザードマップ（避難所の場所も確認できます）
<https://www.city.sendai.jp/anzensuishin/kurashi/enzen/saigaitaisaku/hazardmap.html>



※ 避難所の詳しい場所や説明はこちら
<https://www.city.sendai.jp/anzensuishin/kurashi/enzen/saigaitaisaku/hinanjo/doko.html>



仙台市LINE公式アカウント
※ 市政情報や防災・気象情報を発信しているほか、ハザードマップや指定避難所などを確認できます

命を守るために…（電源の確保）



医療機器が必要な子どものための災害対策マニュアル～電源確保を中心に～
（国立研究開発法人国立成育医療研究センター）
https://www.ncchd.go.jp/hospital/about/section/cooperation/shinsai_manual.pdf



風水害時における人工呼吸器電源確保のための施設利用のご案内
https://www.city.sendai.jp/shogai-nanbyo/documents/nambyoshien_jinkokokyuki_shisetsu202204.pdf



災害時における電動車から医療機器への給電活用マニュアル
（国土交通省・経済産業省）
<https://www.mlit.go.jp/report/press/content/001753401.pdf>

※他にも…

ネットワークの確保のために…充電できる場所は？

スマートフォン（携帯電話）の各キャリアに情報を確認してみましょう。

※以下のワードで検索してみましょう。



つながろう！

・車椅子業者さんが灯油を持ってきてくれた。
・親同士のネットワークを持っていることで安心できる。
・母同士のネットワークが大事です。
・断水で訪問入浴業務は行えず本来業務ではないが御用聞きにまわった。…体験談より

・ヘルパー、民生委員、近所の薬局等からの声かけ（支援の申し出）はありがたかった。
・本人の入浴に困ったが近所のオール電化のお宅で入浴させてもらった。
・近所の方から水や食料の共有があった。日頃からのご近所付き合いは大事。…体験談より

福祉業者

訪問入浴

ヘルパー

相談支援専門員

家族会

ご近所さん

ケアマネージャー

医療的ケアのある方
ご家族

民生委員

訪問看護

通所施設

地域の人

友人

親戚

・発災時、本人を
通所施設で預かってもらえたことが
助かった。
・調剤薬局や医療機関の看護師から安否確認の電話をもらった。
・主治医から電話で安否確認と薬の処方について連絡があった。
…体験談より

主治医

医療機関

学校

調剤薬局

行政

・普段から地域の人に状況を話しておく等、現状を外に伝えていく、自分たちで発信していくことも大事です。
…体験談より

・別居の
祖父母も被災していたが、
車でかけつけてくれた。
・他県の友達が果物を持ってきてくれたり、食料・ガソリンの買い出しを手伝ってくれた。
・学校では家庭訪問や電話等で子供と家族の無事を確認していた。
…体験談より



「災害時要援護者情報登録制度」

<https://www.city.sendai.jp/chiikifukushi/kurashi/anzen/saigaitaisaku/sonaete/engosha/torokusedo.html>



@COCOLISU2006

重度重複障害児者・医療的ケア児者の家族会「ココリスの会」

宮城県医療的ケア児者家族会「ホップメイトみやぎ」



備えよう！

医療機器・医療的ケアで使用する「水」について考えてみましょう



日常生活で水を使う場面

- ・ 物品洗浄、注入用（白湯）、呼吸器加湿、吸引、排泄、注入を温める用、清拭
※付け足しがあれば以下へご記入ください

- ・ 普段（通常時）の1日の回数、1回あたりの使用量をご記入ください。

内容	1日の回数	1回あたりの使用量	1日の使用量

(例) Yさん (22歳)

医療的ケアの内容 ■人工呼吸器 ■気管切開・鼻咽喉頭Iアウェイ ■酸素療法 ■吸引 ■ネブライザー ■経管栄養(胃ろう)

日常生活で使用している医療的ケア等に関する水の量

内容	1日の回数	1回あたりの使用量	1日の使用量
物品洗浄	4回	1.5ℓ	6.0ℓ
注入用白湯	4回	0.25ℓ	1.0ℓ
呼吸器の加湿	管理物品としてもらっているため計測せず		
吸引	管理物品としてもらっているため計測せず		
排泄時	おしりふきを使用		
注入を温める用	4回	0.1ℓ	0.4ℓ
清拭	週2回	10.0ℓ	20.0ℓ

※記載の内容はあくまで一例です

災害時のバッテリー

社会福祉法人 A (共同生活援助、短期入所、居宅介護、相談支援) の「例」



敷地内には太陽光パネル設置の建物あり。
 太陽光パネルは天候不良等に不安があるため、別の手
 段としてポータブルバッテリーを準備。
 大容量 (278,400mAh/1,002Wh) のポータブルバ
 テリーを、ソーラーパネルとセットで 2022 年に当
 時約 10 万円で購入。
 医療的ケア児者の医療機器には、正式には対応してい
 ないが純正弦波のバッテリーであれば非常用として
 は運用可能。
 実際にどの程度使えるか確認のため、担当しているご
 家族に協力いただき検証。

利用状況
 1 日キャンプのため外出時にテスト (夕方から約 8 時
 間使用)
 常時酸素使用、不定期に吸引あり、モニターを接続し
 たほか、卓上扇風機に使用。
 フル充電の状態から、キャンプ終了時残 75%
 太陽光パネルは 1 時間ほど接続 (+5%) ※天候曇り
 上記のことから、24 時間常時使用の場合およそ 10%
 程度残る計算

※記載の内容はあくまで一例です

※ そのほかポータブルバッテリーについては下記のページもご覧ください。



宮城県医療的ケア児等相談支援センターちるふあ
<https://miyagichilfa.org>

(参考) 事業所ではどんな備蓄をしているの？

施設及び利用者概要

A

【児童発達支援、放課後等デイサービス】
 15 名 (未就学児 2 名、小学生 5 名、中
 学生 2 名、高校生 6 名)
 1 日利用者数 6 ~ 7 名
 【本部事務所】【ヘルパーステーション】

B

【児童発達支援、放課後等デイサービス】
 15 名 (未就学児 1 名、小学生 7 名、中
 生 2 名、高校生 5 名)
 1 日利用者数 5 ~ 8 名
 【ケアプランセンター】【相談事業所】

C

【生活介護】10 ~ 30 代の成人 23 名
 1 日利用者数 10 ~ 12 名
 【ショートステイ、一時支援】日中のみ
 1 日利用者数 5 ~ 8 名
 【クリニック】

例 1
 児童発達支援
 放課後等デイ
 サービス
 生活介護等

1 日に勤務するスタッフは日によって変動あり。
 A...15 名程度 B...8 名程度 C...15 名程度 (それぞれ施設全体の人数)

非常用配置物品

現在は日中支援のみであり、ご家族のお迎えを待つまでの間の準備物品を備えている。
 今後ショートステイで宿泊を伴う場合は、さらに備蓄を増やす予定。

飲料水

C のエコキュートの中に備蓄水があり、非常
 時に飲用としても使用できる仕組み (800ℓ
 程度) ・他事業所にペットボトルの備蓄水を
 配置 (2ℓ×12 本の箱を 1 箱ずつ) ・他利用者
 用にゼリー状飲料を準備 (6 個入り 1 箱ずつ)

食料

利用者用非常用備蓄ミキサー粥 (5 年保存)
 粉末タイプ (放課後等デイ 15、生活介護
 20、ショート 6)、ペーストタイプのレトル
 トパウチ食品 (経管栄養にも対応) (各 10 ず
 つ)、通所利用者には 1 日分のそれぞれの食
 事や経管栄養剤をお預かりしている。スタッ
 プ用に、アルファ米、缶詰、乾パン、羊羹、
 インスタント食品を各事業所に配置。利用者
 で普通食を摂取可能な方も利用する。

電気

A...カセットコンロ式ポータブル発電機
 B...ソーラーパネル式ポータブル発電機
 C...太陽光蓄電システム (非常時に
 13.5kWh 供給可能)
 各事業所の送迎車にコンセントにつな
 がるインバーターを設置

日用品

紙容器 (食器)、ラップ、カセットコンロ、
 電池、使い捨てカイロ、エプロン

衛生用品

アルコール消毒液、絆創膏、おむつ、生
 理用品、おしりふき、マスク、ウェッ
 プティッシュ、プラスチック手袋、経管栄
 養用のシリンジやチューブ

医療用品

懐中電灯、ヘルメット、軍手、ラジオ、
 ブルーシート、毛布
 → 各事業所ケースにまとめて保管し、
 必要時持ち出せるように配置している。

各事業所でメンテナンス担当を決め、定
 期的にリストの見直しを実施。いつもと
 違う非日常に利用者慣れてもらうため、
 年に数回試食し慣れてもらう機会を作る
 (消費期限や使用期限の近いものを、防災
 食の体験としてあらかじめ試食し慣れて
 もらっている)。また、ローリングスト
 ックとして、古いものから消費し、消費
 した分は新しく備蓄することとしている。
 スタッフも試食し、よりおいしく感じる
 ものを備蓄品として購入している。

※記載の内容はあくまで一例です

(参考) 事業所ではどんな備蓄をしているの？

例2
訪問看護

事業所で保管している在庫

飲料水

4 ケース (500ml ペットボトル×24 本/ケース)

食料

高齢者向けのペースト食を若干

電気

電源関係は無し

日用品

オムツ (大人用 2 パック)、パット (大・中・小: 各 30 枚)、吸水シート (20 枚)、乳幼児用肌着 (お下がり)、だっこ紐、ベビーラック、簡易浴槽 (乳幼児用)

衛生用品

ディスポーザブル手袋 (100 枚入り 40 箱)、エプロン (50 枚入り 20 箱)、ペーパー (40 袋)、マスク (50 枚入り 20 箱)、アイソレーションガウン (100 枚) (※①)、アルコール綿 (60 包入り 10 箱)、携帯用アルコール (10 本)、アルコール (大 10 本)、滅菌ガーゼ、コットン

医療用品

吸引器 1 台、吸入器 1 台、吸引カテーテル (大人用、小児用: 各 50 本) 栄養カテーテル、手動用注入チューブ、シリンジ、薬用チップ、モニターの予備電極

・訪問しているご家庭での備蓄の品目や量については、日ごろの訪問時に家族と相談している。
・備蓄品については、訪問先に看護師が必要な衛生用品を一式置かせてもらうようにしており、緊急時に備えている。また、日常的に使いつつ補充をしていくことで期限切れ等が無いようにしている。

※①アイソレーションガウン: 医療現場などで、ウィルス感染防護として使用されるガウン

※記載の内容はあくまで一例です

どこで被災するかは分かりません (自宅・学校・通所先・車で移動中など) いろいろなところに、最低限の必要なものを一式を準備しておきましょう。家族で「避難するときはこれを持っていく」を決めておきましょう。



非常用持ち出し品の例 (一般的な物)



<https://www.city.sendai.jp/gensaisuishin/kurashi/anzen/saigaitaisaku/sonaete/bosai/mochidashihin.html>

作ってみよう!

緊急連絡用カード・緊急連絡先、いざという時の動き・必要な備えについて、備蓄チェックリストなどなど...

私の災害時個別計画 (パーソナルプラン)



<https://www.city.sendai.jp/shogai-nanbyo/saigidkikobtukikaku.html>



おわりに…

「仙台市医療的ケア児者等地域支援連絡会作業部会」は、医療的ケアのある方々の住みよい暮らしのためのツール等を検討する場として、令和4年度に設置されました。

作業部会では「災害時の備え」をテーマとし、話し合いを重ねてきました。

その中で、医療的ケアのある方々やご家族・支援者のみなさんに、いつかは起こる「災害」のことを普段から考え備えてもらうために、何か参考となるものを作れないか、との話し合いに至り、「災害時の体験談」と「備えのための情報ツール」を作成する運びとなりました。

この冊子が、医療的ケアのある方やそのご家族、支援者の皆さまが、災害時の備えを考えるきっかけとなり、少しでもお役にたてれば幸いです。

～～ 発行にあたり体験談の聞き取りや情報のご提供に

ご協力くださいました皆さまに心より感謝申し上げます～～

作成

仙台市医療的ケア児者等地域支援連絡会 作業部会

(委員：五十音順敬称略)

- ・サポートセンター Tagomaru センター長 安藤 明彦
- ・エコー医療療育センター相談支援事業所ういず・ゆう 係長 猪苗代 華恵
- ・短期入所あいの実ストロベリー 管理者 岩元優子
- ・障害者相談支援事業所サポートはぎ 主任相談支援専門員 高橋 克弥
- ・障害者相談支援事業所くれよん 相談支援専門員 福地 真衣子
- ・仙台市 障害者支援課職員・障害者総合支援センター職員・宮城野区家庭健康課職員
若林区家庭健康課職員・若林区障害高齢課職員・太白区障害高齢課職員
南部発達相談支援センター職員

(オブザーバー) 宮城県医療的ケア児等相談支援センター「ちるふぁ」

(事務局) 北部発達相談支援センター

令和 6(2024)年 12 月発行
仙台市北部・南部発達相談支援センター
〒981-3133 仙台市泉区泉中央二丁目 24-1
電話：022-375-0110